

六匹の猫たちは 私の守り神様？

猫と
病氣と
死を見つめて…
不思議な体験談
「猫の恩返し」



潜在意識の心理カウンセラー / 姓名リーダー

三宅 麗子

装幀・イラスト

浜田有弘（株式会社ジツクランド）





はじめに

数ある本の中から、この本に目を留めていただき、誠にありがとうございます。

猫が「テーマ」の本ですが、心理カウンセラーが書く本ですので、読まれた後、なか、少し心のモヤモヤが取れた、すっきりしたと感じていただけるととても嬉しいです。

さてこの地球上には数えきれないほどの「生物」がいます。目に見える大きな動物から小さな虫たちまで、さらに目に見えない細菌やウイルスなど、ありとあらゆる生物まで入れると一体、どれほどの数でしょうか？ 一兆？ 一京？ それとももっと？

その数多^{あまた}の生物の頂点に立つのが私たち「霊長類」の「人間」という名の「生き物」であり、その数は70億弱。その霊長類の「人間」として私たちはこの世に「生」を受けておりますが、それは決して「偶然」ではなく、私もあなたも「人間」としてこの世に生まれるべくして生まれさせていただいた貴重な「必然」なのであります。

ではなぜ、「私」は人間なのか？ いえ、なぜ、人生の失敗者である愚かな私が「人間」

で、私に「気づき」を与えてくれた六匹の偉大で賢い猫たちがなぜ、「猫」なのか？なぜ、猫に教わる私が霊長類の人間として「存在」するのか？それは、一体、なぜ？

これらの「疑問」は私が一生、考えるべき深い「謎」であり、重要な「問題」であります。しかしこれらの謎や問題はその「答え」そのものに「価値」があるのではなく、それを人間の私の「アタマ」で考え、「心」で捉えること自体に深い「意味」と「価値」があるでしょう。なぜなら人間はすべからず「考える葦」だから…。

人間として死ぬまで「考える葦」を「意識」して生き抜くことが、人間としての貴い「命」を生きたことになるのでは？ その人間の「命」の重みを、六匹の猫たちから痛切に感じさせてもらったことをお伝えしたくて、この本を出版させていただきました。

今回、出版が叶いまして、感無量でございます。本当にありがとうございます。

猫や犬のペットを飼っているあなたにもきつと、私と同じような「何か」を経験されたり、気づかれたりしたことでしょう。あるいはペットを飼っていないあなたにも、この本を通して「何か」を感じていただければ、こんな嬉しいことはございません。

動物を飼うのが「善人」で、飼わないのが「悪人」なんていう短絡な発想ではなく、

人間が動物（ペット）を飼う「意味」とは？ 「地球」の動物と人間の「関係」とは？
それは地球で保護される「動物」と保護する「人間」という「関係」であり、それは宇宙で守護される「人間」と守護する「存在」という「関係」と同じでは？ それは一体、誰？ それは、一体、何？ その宇宙の「存在」を地球の人間に知らしめすために、猫や犬がペットの「役目」で、必要な「教え」や「気づき」を託されて、人間の前に顕れる？ たとえ人間や動物という違う「使命」に分かれていても、同じ地球で生きる「生き物」であり、「命」であり、「魂」であり、その存在を「神」ということが許されるのなら、人間はこの宇宙での「神」と同じ「意識」を持ち、その神の分霊（ワケミタマ）として代わりに地球で生かしていただいている貴重な「生命体」なのですから…。

【25年間の猫たちとの共同生活にピリオド！】

私は四半世紀（25年間）にもわたり、六匹の猫たちから貴重な体験をさせてもらいました。六匹の猫たちとの「一期一会」の巡りあいは、私の「魂」の成長のためにはすべ

て「必然」であり、それはまた神様（天Ⅱ宇宙Ⅱ存在）からの大きな「お計らい」だったと、今では確信しております。どの猫たちも私に生きる「ヒント」を与えてくれ、それぞれの人生（猫生？）を私のために個性的に生き抜いてくれました。そんな彼らには愛しさで感謝でいっぱいです。

六匹の猫たちにもそれぞれに心や魂や意識があり、もちろん「個性」もあり、個性の違いが猫たちの「使命」となって、私にさまざまな「気づき」を与えてくれました。六匹の猫たちが私の「人生」を修復するために、「神」から「眷属」けんぞくとして遣わされて、それぞれの「使命」を果たしたのでしょうか。と、思えてなりません。

自分の負の過去に執着しないために、あるいはツライ過去から逃げないように、さらに過酷な人生を送らないように、六匹の猫たちが現れてくれたような気がします。そんな六匹の猫たちとの不思議な思い出とともに湧いてくるのは、人間として生きるための「気づき」と、猫たちからの「恩返し」でした。

昔の「民話」の「鶴」だけでなく、猫にも「恩返し」はあったのです。人間以上に猫たちは「恩」や「情け」が分かっている、すべて彼らは「お見通し」だったのです。そ

れらは宇宙に生きる生き物としての遍く「掟」であり、人間だけの特別な「掟」ではないのでしょうか。この地球も宇宙の小さな星の一つであり、この「宇宙の掟」に地球（星）も生き物もみんな統合されているのでしょうか。そういう「掟」を人間よりも、感覚が鋭い動物のほうが、より敏感なのは当たり前なのです。人間も動物も地球の空気を吸う、同じ「生き物」で、同じ「掟」に生きる「命」なのですから…。

そんな敏感な猫たちが生きる「スベ」を教えてくださいました。お互いに言葉が解らないからこそ、感覚の鋭い猫たちの仕草や行動には、「何か」を訴えているように感じます。それが「ペット」として生きる猫たちの人間に対する「使命」なのかも知れません。その「使命」を彼らはキチンと悟っているのです。人間に悟らせるためにこの地球に猫も犬も「ペット」として「存在」するのでしょうか。六匹の猫たちで、私ははつきりとそれを悟らせていただき、今はただただ「ありがとう」の感謝の言葉しかございません。

私の過去と一緒に生き抜いてくれた六匹の猫たちからの数々の「メッセージ（気づき）」を「感謝」を込めて書きたいと思いました。そのトキは気づかなかったのに、書くことによって「そうだったのか!」と思いがたる「節」も多々あり、まるで「書け!」と猫

たちが背中を押してくれているようで、これも私には「意味」があつたのでした。

猫（ペット）を飼つてみてつくづく感じます。猫は「死」の最期まで飼い主が看取るのが理想であり、飼い主は「飼ひ続ける」という「継続」こそが「義務」であり、「最期」まで「看取る」ことがペットへの「愛」なのです。特に、ペットが年老いてから飼い主の都合で手放したり譲つたりしては、老いゆく猫の「猫生」はもはや無いに等しく、寂しい「老後」を強いることにもなりかねません。ペットは決して人間の「モノ」や「私物」ではないのです。どんな理由があつても、手放すことは人間の勝手な「言いわけ」にすぎないのです。ペットも人間と同じ「命」ある「生き物」だから、「命」ある間は、たとえ老いたとしても決して手放してはいけません。いえ、「命」は手放せない、手放す「モノ」ではないのです。それが「霊長類」と自負する人間としてのペットに対する最低限の「義務」なのでしょう。いえ、六匹の猫たちは「ペット」ではなく、私の掛け替えのない大切な「家族」であり、「パートナー」であり、有り難い「守り神様」だったので。それを私は猫たちが死んでから、知らされた、いえ、悟らされたのでした…。

この本は、私の「不思議な猫たちとの実話」です。私だけの独りよがりの「物語」で

も、少しでも多くの方々にこの「事実（猫の恩返し）」から、私の心の中（意識）で猫たちが守り神様に、「変化」していったことを知っていただきたいのです。本当はペットで飼われる動物は、野生の動物と同じではなく、人間の「生まれ変わり」なのでは？

過去に何回も出版のチャンスはありましたが、そのトキは時期尚早で、神の貴い「お計らい」だったように感じています。もはや還暦を過ぎた人間の身には、猫の「最期」を看取る自信がなく、「もう猫は飼わない」と心に決めました。残りの人生は、「意識」を浄化させるためと、あの世に還るための自分の直霊（ナオヒ）と真剣に向き合うために使います…。今はただ、六匹の猫たちの思い出に浸れる幸せに感謝、感謝、感謝！

【プロローグ…死んだ子猫が生き返った???】

この世にも不思議な猫たちの物語は、もう25年以上も前になるが、すべて「事実」である。残念ながら六匹の猫たちは、今はもう、この世にはいない…。最後にメスの病猫タラが亡くなり今年（2018年）で早や2年が経とうとしている。皮肉なことにこの

病猫タラが他の猫たちの中では一番、長生きした猫だった。また三匹目のオス猫チャコとの出会いは、それはそれは不思議な「巡りあわせ」であった…。

それは、貰ったばかりの名もない子猫（チャー）がすぐに死んでしまい、落ち込む心を紛らわすために仕事先に行く途中の、公園での「出来事」だった。

なんと、死んだ子猫が、そこにいた！ いや、そっくりな子猫が、そこに！

ミャーミャー鳴きながら私の足にまとわりつくではないか！ その、そっくりな子猫は初対面なのにチットモ、怖がらない。まるでズウーッと前から私の「飼いい猫」のように、人懐っこく、頭を私の足にこすりつけては、ミャーミャー声をあげて鳴いていた。

目と目が合った！ こんなチツチャな猫でも人の顔色を見る「スベ」は知っている？

まるでダッコ！ と言わんばかりに大きく一発、ミャーと催促した。

それにツラれて思わず、ダッコ！ 信じられない！
死んだ子猫が現れるなんて！ いや、そっくりな子猫が！



こんな偶然って、あり！　こんな不思議って、あり？

死んだ子猫が、呼び寄せたのか？　この子猫を

拾わなくては、「罰」があたる？　そんな

切羽詰まった気持ちに、陥った！　偶然とは

思えない。いや、この世に偶然はないのだから、

やっぱり、神の、「思し召し」？　そんな神がかり

な不思議な気持ちに、襲われた！　見れば見るほど

そっくりだ。たったの二日間だったけれどはつきり、

覚えている。毛の色といい、大ききといい、泣き声といい、あの子猫に

瓜二つ！　外見だけは…。このそっくりな子猫と私は赤い糸で、つながれている？

きつと、この子猫は死んだ子猫と「二つ」の命を生きて、私を守ってくれるような気が

する。そしてそのとおり、このそっくりな子猫は私の頼りがいのある「守り神様」とな

るのだった。しかしこのそっくりな子猫に巡りあうまでに、死んだ子猫以外にもう一匹、

かわいそうな年老いたメス猫チーが、いた…。



チャコ

【猫たちの紹介】

まずは、六匹の猫たちを飼った順番から紹介します。

●チー…一番目のメス猫

知人から貰ったトキは、年齢不詳で、すでに老猫感が強いメスの灰色のサバトラ。知人が付けた名前。

本来の性格はきっと優しいのだろうが…。

このチーは、チャコには自分の子供のように可愛がるが、ミコにはイジメ倒すのだった…。



●チャー…二番目の子猫

友人の知り合いから貰って、三日目に死す。

名前を付ける間もなく、性別も分からずじまい。

茶色のキジトラか。

この本を書くに当たり

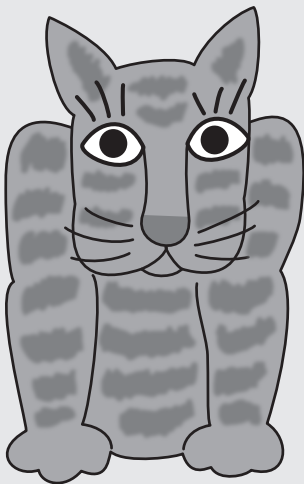
チャーと命名。

(ごめんね！)



●チャコ…三番目のオス猫

この猫を拾う直前、二番目の子猫が死んで、仕事先に行く途中でそっくりな子猫を公園で拾う。生後数週間位か、オスの長毛で茶のキジトラと洋猫の混合か。名前は茶色の毛から。性格は穏やかで悟った雰囲気猫の中の猫のよう。母のようなチーと嫁のようなミコと分け隔てなく接する。それが災いのもとに…。



●ミコ…四番目のメス猫

三角公園横のマンションの芝生で拾う超～美形猫。生後一ヶ月位でメスの灰色のサバトラ。鳴き声からの名前。老猫チーと外見が似るが、チーとは犬猿の仲で、一生イジメ抜かれ、かわいそうな猫生を送る破目に…。しかし最後に笑うのは…。



●タラ…五番目のメス猫

三番目のオス猫チャコのために知り合いから貰う。
生後一週間位か。メスの三毛猫でマンダラの
毛からの名前。生まれつき腸閉塞
で生死をさ迷う。一生涯、病気
持ちで虚弱体質の猫。
病気で甘やかしすぎたため神経質
で超わがまま。
後釜のペルとは相性が超～悪い。
この病猫タラが一番の長寿猫と
は何とも皮肉なもんだ…。



●ペル…六番目のオス猫

母の入院で預かるが、母の忘れ形見となる。年齢は
10才以上か。オスの正統ヒマラヤン、母がペルシャ
猫と勘違いしての名前。
母は先天的に啞猫と信じて
いたが、ペルが鳴いたので
もうビックリ。半野良的
性格のためか、好奇心旺盛
で無頓着なので、タラとは
相性が超～悪いが、ペルは
タラが大好きだ。ままたら
ないのは人間も猫も、一緒
ではある…。



●私…

デザイン企画事務所設立時（1985年）より

勤務、33年目のプランナー兼心理カウンセラー。

婚家先に息子を残し離婚。現在は独自のカウンセリングに力をいれるが「人生を償う」ためと「己を知る」ために一生を捧げると決心。20余年前にある原因で「狭心症」と誤診。交通事故で「むち打ち症」にも。

毎日牽引と電気治療しないと、還暦後には「寝たきり」になると医者より宣告され、パソコンも禁止されるが、一ヶ月後、猫たちの「生き様」を観て完全に通院と薬を止める。

それ以後再発も寝たきりにもならず。最初の老猫チーより六匹の猫たちと暮らし、二年弱前に最後の病猫タラを見送り、現在は、病気や病院や薬とは一切、縁なしの一人住まいの充実した人生を送る。来世はこの世に生まれたい、と覚悟して今を生きたことと、「意識」を浄化することの、二つを意識して生きる…。ただただ、猫たちに感謝です。



ミーヤン